

猪犬と登る猪猟の頂点へ 猪猟の上級編 ⑱ 田宮 治

肝心な勝負どころ

問題ではない。

この辺の実力の差、つまり、どこまでも追って完勝することと、

よく戦ったがあと一步のところ猪に逃げられた、というほんのわずかの差が、これからの親方としての大事な努力目標であり頑張りどころなので、何としても修正し改善しなければならぬ猪猟成功への大道なのである。

このわずかな差が実によく分かるのが、八〇⁺（本来なら一〇〇⁺以上）の瘦せた猪のオスを撃ち獲った大一番である。それは説明なしのガチンコ勝負であった。

いつものように、メンバーは私が勢子で、北嶋、平野両氏と新人の坂東氏であった。千葉の猟場はどこも竹の大藪であるが、猪さえいれば至難とか攻めづらいとかは

私はヨシ号、マロ号、シロ号を連れて、北嶋氏がグレ猪に完勝し、見事に咲き誇った大杉林から上っている出峰伝いにゆっくりと頂上を目指して狩り始めた。この一戦は北嶋氏の腕試しと思いい、私は一切の指示命令をしない。北嶋氏はすっかり親方が板についたよう、二人のタツを良い位置に張っていた。

よしそれならば、この一戦で私の役目は何としても猪をタツに嵌め込むことである。犬たちは猪臭を既にとったようで、小峰伝いに大山の頂上を目指して早々に姿を消した。

この猟場は二本の大峰が一本と成って君津市の国道まで続く大山であり、犬たちが猪を追って国道に飛び出せば死の危険がある。またゴルフ場でも猟場は分断されて

いる。犬たちと上る大山は大杉林になっていて、その中には程良い雑木林と真竹の大藪が点在している。

この猟場を開拓して今回で出猟三回目になるが、思ったとおり猪は多く、前回は二戦とも見事な谷落として水のない谷底に嵌め込んだ。

一回目は、そこを私が一層からいから撃ち獲った。もう一回は、新しく入会して勢子長をしていたA氏が谷底の凹地に追い詰め、ちょうどモグラ叩きのように攻めている犬たちを上手に交わし、谷の凹地一面を覆った枯れ葉の中からヒョコヒョコと顔を出したり引つ込めたりしている猪を見事四、五層くらいから撃ち獲った。

この二戦とも北嶋氏の一人立ちを願い、私が立案した頂上作戦で、ガード役にはベテランの平野

氏と実力者A氏である。当然、使う犬群は一軍犬の中でも極度の犬芸が必要なもので、いつものマロ号、ヨシ号、シロ号である。

もし失敗した場合、その原因が勢子の私だったり犬たちであってはいならない。この日の第一戦で何としても完勝して、第二戦には持ち込まない決心をした。

犬群の動きから、猪は頂上を右に木更津方面に行った大尾根の真竹藪を見た。谷底の大杉林にあった猪跡はかなりのもので、一〇〇⁺以上はある。ゆっくり上って来たつもりだったが大汗をかいた。これから始まる一戦を頭の中で組み立てながらウンケルをグツとひと飲みし、タオルで汗を拭いた。

頂上全体が大杉林で絶景とは縁遠く、朝だというのにこぼれ日さえ差し込まず薄暗い。

猪の足跡は紛れもなく一〇〇⁺以上なのに、杉林の粘土質の土にくっきりと残っている爪痕の深さがどうもおかしい。まるで小物か中物程度のものに見える。

どうも交尾期を終えたガリ（瘦

せた強いオス猪)のようだ。「よし、この一戦はガリだろうと、どーんと来い」である。

そんなことを考えながら三分も歩かないうちに、何とヨシ号の追鳴きが始まった。あっという間にマロ号、シロ号も一緒になっての猛烈な追鳴きになる。

私は銃を両手で持ち、下章もないう大峰をぶっ飛んだ。鳴き声は予想どおりの右下に広がる真竹の大藪からで、バリバリと犬たちと猪の闘争音も聞こえているが姿が見えない。また、分け入られる所でもない。

この犬群であれば、どんな猪でも大竹藪で必ず止められると思っただけ、早立ちしたガリでは仕方ない。

二、三分もしないうちに、一気に大竹藪を突き抜けて二〇〇メートル先の出峰を越えて二人の待つタツのほうに向かった。犬たちの凄いい追鳴きがあつという間に遠くになった。GPSにもその速さが映し出されている。

「一番からです。タツ注意！猪が行きますよ」と三人に告げ

る。みんな待ってましたとばかりに、「了解、了解、了解！」の返事である。

「よし、これでいい」と、私は山彦会会員の成長だけを願って何も余計な作戦を立てず、ただ黙々とマロ号たちを追い続けた。

大杉林を突き抜けて、大尾根が二つに分かれている雑木林の広い台地に差しかけた所で、「猪が行きますよ。犬たちの鳴き声に注意してください」と、気になってまた告げていた。右の尾根八〇〇メートルの辺りに平野氏と坂東氏が待ち受けているはずである。

何としても、右の尾根に追い込まれて全力で峰筋を突っ走って来た。ところが、ガリなればこそ逃走術で、早くもタツを感じしたかのように左側の尾根をどんどん突進して行く。

「しまった、あと一步のところ猪の左尾根の突入を断ち切れたはずだったのに……残念だ。あれほど用心して攻めたのに……さて、どうしたものか？」とGPSで確認すると、左の大峰は大きく左にカーブして、六〇〇メートル

先にある車道と小川で中断されている。車道は私の立つ大山と向こう側に並び立つ大山の間をグルッと回るように通っている。山裾には集落が二、三カ所あり、道端に田畑が細長くある長閑な山里である。

成功は成功のもと

その山裾には民家があつて、飼犬が鳴いていたり、車道が通っていたりする場所では、犬芸が超一流に仕上がっていないければ安心して狩猟などできない。

この猟場で最大の問題は、山裾を縫うように回っている細い車道と反対側にある国道である。

民家や飼犬に犬たちが絶対に寄り付かないように、また猪を追った犬たちが危険な国道に飛び出さないように万全の安全対策が必要となる。

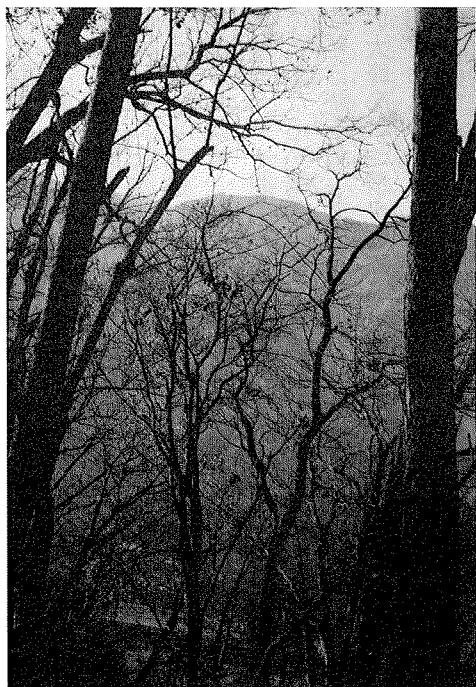
猟場全体を精査すると、大山は標高二〇〇メートル足らずで、そこから続く長い尾根は三、四メートルある。その山裾を細い車道が大きく回っており、まるで道に囲まれた

浮き島のような山容になっている。当然、こんな猟場で猪と戦うのだから、犬たちに追われた猪は民家や国道に平気で飛び出すこともあるが、そんなことに絶対ならぬ安全対策として、緻密な計画の基に張り巡らせるタツなのである。

私はこの安全対策が千葉のどの猟場でも一番重要であることから、この一戦では特にタツの張り方については何も言わず、見守ることにしていった。猪猟の安全対策は親方はもちろんのこと、山彦会会員の全員が常に心掛けていなければならない大事なことなのである。

北嶋氏はこの重要な安全対策もきっちりとできるようになっている。二人のタツ配置はなかなかのもので、飼犬が鳴いている民家の上に坂東氏を、車道の両側に家が建ち並ぶ集落の後ろに立つ大尾根(八合目)の猪道にはベテランの平野氏を配置した。

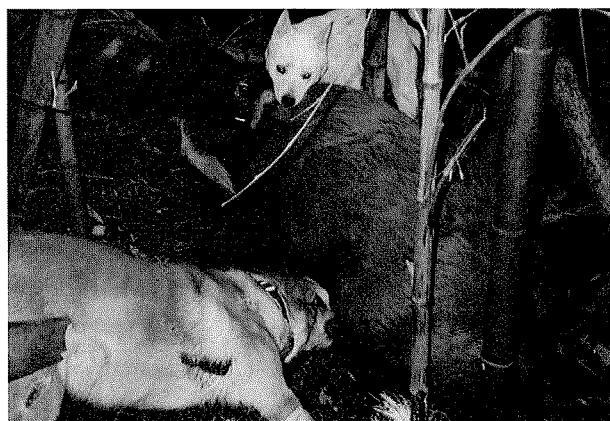
そして北嶋氏自らは、大山の反対側に車で回り、一番危険な国道に絶対に犬たちが飛び出さないよ



山梨の猟場。何年経っても山容はあまり変わらないが、肝心の猪がめっきり少なくなった



武蔵号、シロ号、ヨシ号の頑張り。篠竹藪の止め現場で3 m から撃った128 kg の猪



マロ号、ヨシ号、シロ号の激戦。右脇腹にこんなケガをしてもこの大猪に一步も引かず、ますます鋭い咬みの連続である。コンビのシロ号もこのファイトにびっくりの様子。真竹藪でもめったにない受傷だが、138 kg の大物との激戦では仕方がない



ブイ号、カツ号、武蔵号のお手柄 (135 kg の猪)



シロ号、千代号、ヨシ号の見事な止め三

うに移動タツを張って、私と犬たちの様子を見ながら小沢から出峰伝いに大山の頂きを目指した。

さらに北嶋氏が成長したと思つたことは、飼犬が鳴く民家に手土産を提げて挨拶していることや、この大山に括り畏があることを事前に調べ上げていたことである。

ところで、すっかり猪の少なくなった千葉の猟場の中で、この大山だけに猪がいるということは、この猟場がいかに狩りにくく、括り畏まである危険極まりない猟場であることから、猪が獲りづらいことを物語っている。

それでも猪さえいれば、どんな至難の猟場であっても、この犬群ならば必ず勝つて猪猟の極致を示し、「これが本物の猪猟だぞ！」と、お互いが認め合い、喜び合つて猪猟の完成を締めくくりたいと私は考えていた。

「失敗は成功のもと」というけれど、この一戦で猪を逃がしたのでは猪猟の完成どころか楽しみも喜びもない。どんなに素晴らしい戦いをしたとしても、ここでの失

敗は許されないのである。ここが勝負の正念場であり、押し出す俺流はただ一つ、このガリを撃ち獲ることである。

この成果を重ねることが、さらなる高嶺に上り行く大事な礎となる。大局的に見れば、何事にもよらず失敗の連続で知る成功への道筋であろうが、私の今ある存念は、何がなんでもこの一戦で猪を獲ることであり、ここで逃がしたのでは、教えることも先に繋げることも何一つ残らない。

長い年月を費やして仕上げるのであれば、多くの失敗は多くの成功に繋がるが、わずか二年の鍛錬で猪猟の極致となると、「失敗は成功のもと」などと暢気なことは言つてられない。

いま私が彼らにしてやれることは、猪に勝つことだけを積み重ねる執念の押し出しであり、あえてここからの戦いでは「成功は成功のもと」となるように頑張りたいのである。

しかし、目下の戦況はそんな思いに反し、全く正反対の大尾根にどんどん猪が突き進んでいる。こ

のまま進めば六、七〇〇メートルで小川と車道に突き当たり、そこでの追跡が断たれてしまう。その先にはタツがいらない。だからこそ、ここから先の戦術は、私が何とかしないことにはガリの思うツボになり、簡単に逃げ切られてしまう。

「こんなガリくらい何とかせんかい。ここがお前（勢子）の腕の見せどころだぞ。絶対に勝たずは何とする」と自ら気合を入れ、やっと巡り来た、この勝負どころの覚悟を決めていた。

こんな時に頼りになるのは一流犬群である。そのことを示すかのように、犬たちはますます元氣である。出峰の登り坂になるたびに接近戦になって、ギャッギャッと得意のチョンガケ（猪の逃げ足に咬みを入れ、行き足を止める最高芸）を繰り返して何度も止めるが、敵も然る者で、なかなかきつちりと止め切れない。

大尾根の右下に広がる大杉林の真上にある篠竹藪に犬たちが差しかかった。私はここが千載一遇のチャンスと捉え、犬たちが藪中で

猪を威嚇する鳴き声を聞きながら一気に犬たちを追い越して、大尾根を突っ走って出峰の上に立った。

「よし、これでいい。犬の行く先を断つたのだからしめたものだ。ゆっくりと犬たちの様子を見ながらタツのいる方向に追い詰めればいいことだ」と、ほっと一息ついたその時である。

追い越した出峰と、私が立っている出峰の中間にある小谷の始まりの辺りで、とうとう犬たちの鳴き声が絡み合いになった。ワンワン、キャンキャン、グオーグオーと、いつもの見事な谷落しとなり、一直線に大杉林に流れ込んで小沢伝いにどんどんと落ちていった。

私は急いで鳴き声の真上まで大尾根を戻り、犬たちと猪が飛び下りた足跡を確認しながら下り始めると、そのすぐそばにもう一つの大きな足跡があることに気付いた。斜面の腐葉土に深々と残っていたのは、北嶋氏の靴跡だったのだ。

（つづく）